

日本文化部会

—概要—

小林 加代子*

日本文化部会では、本学から、哲学コース助教の中野裕考先生、哲学コース博士後期課程の近藤弘美さん、歴史学コース博士後期課程の柏居宏枝さんの三名、台湾国立政治大学から副教授の徐翔生先生、修士課程の林怡伶さんの二名で、計五名のご報告者から発表があった。

ここでは、それぞれのご発表に関して、概略を述べさせていただく。

まず中野先生からは「ルソーと和辻の非リベラル寛容論」とのことで、寛容論がリベラリズムの専売特許であるとされる風潮に疑問を投げかけ、ルソーと和辻哲郎を手がかりとして必ずしもリベラリズムに依拠しない寛容論を模索しようというご報告だった。今年度の本コンソーシアムは、「多文化共生社会に向けて」をテーマとしている。ヨーロッパ近代哲学をご専門とされる中野先生からは、ご自身のご専門と和辻の思想との共通性を考えるという、まさしく本部会のスタートとして方向性を示すにふさわしいご報告をいただいたように思う。

次に、生命倫理学をご専門とされている近藤さんからは、優生法に関するご報告をいただいた。国民優生法と優生保護法の成立過程、それぞれの特徴と問題点を検討することから、「遺伝」という言葉における日本人の倫理観を論じるというもので、近年話題になっている出生前診断の問題等にも示唆を与えるご発表だった。

歴史学コースの柏居さんからは、憲法などの国

家組織がどのようにヨーロッパから日本に取り入れられたのか、そして発信者であるドイツと受け手である日本とのやり取りについて考えるという見地から、明治憲法構想過程における宗教の位置づけについてご発表いただいた。今回特に問題とされたのは、当時の「信教の自由」についてで、大日本帝国憲法に「信教の自由」が明文化されるまでのプロセスが検討された。これが国家の承認を得るための国際基準を模索する過程において、お雇い外国人の意見と為政者の判断において宗教がどのような立ち位置にあったかについて、大変詳細な考察がされていた。

台湾政治大学の林さんからは「小野小町伝説における遊女像」との題目で、歌物語における歌人としてだけではなく、恋多き好色の女性としての小野小町についてご報告頂いた。「色好み」というと在原業平などから、ある種、粋な男性の誇りであるようなイメージが先行するが、小町の伝説に見られる「色好み」とは、彼女を求めてくる男性たちのために奉仕するという自己犠牲と伴う利他行為を実践する姿であるとの指摘がなされた。また、小町に関しては、彼女を観音菩薩の化身とする物語が残されている。こういった「観音変化譚」が形成される前史には、遊女が聖との結縁と願って救いを求める話や遊女が仏門に皈依する話といった遊女成仏譚が見られ、それが下地になっていると推測される。

多くの男性のために身を犠牲にしてきた遊女小町と、多くの人々を仏道へ導き救済する観音菩薩とのイメージを重ね合わせ、さらに遊女成仏譚

*お茶の水女子大学大学院院生

という下地があったことから、観音菩薩の変化としての遊女像が形成されたのではと、まとめられていた。

最後に、台湾政治大学の徐先生からは「日本人の死生観」についてご報告頂いた。徐先生はこのテーマについて多角的に研究に取り組みされており、当センターのプロジェクトにおいてたびたびご協力いただいている。

徐先生は、特に、中国においては儒教や道教の現世主義の影響によって古くから生を重んじ、死に無関心な態度を示しているが、日本においては対照的にかねてから死の問題に関心があり、死のあり方に深い興味を示しているという点に注目なさっている。日本人は時に死を高度に肯定し、場合によっては死を美化することすらあったということに着目され、日本人の死生観がどのような形態をとってきたかについて、古代から近代までの文芸作品を通して明らかにするというご報告であった。

先生のご指摘によれば、古代日本においては神道の存在によって黄泉の国が意識され、この死に対する安心感によって悲しみや恐怖を回避していた。その後、仏教の受容によって中世において日本人の死生観は変わっていく。特に浄土教の興隆に伴い、死後の世界は黄泉から浄土へと移り変わり、それまでにはなかった死後の救済が意識されるようになる。ここで「浄土に往生する」という目的から、中世の日本人は死を恐れるどころか、進んで死に赴く者が現われてくる。このような死に対する独自の見方について、徐先生は『平家物語』に始まり『葉隠』『曾根崎心中』などから確認されている。さらに、近代に入ってから、日本人は死を高度に肯定することができなくなったとされるが、日本の伝統的な考え方のうちに、死に対する肯定や美化は変わらず存在していることを指摘される。

徐先生がこのように日本人の死生観について研究されるのは、日本人の死に対する態度が、中国

人の死生観に示唆を与えるものではないかとのご関心からであり、例えば東日本大震災に際しての日本人の理性的かつ冷静な姿勢は、その死生観からくるものであると分析され、同じく地震が多発するところに位置する台湾において、当時の日本人の対応は大きな示唆を与えるものがあると考えられている。そして、今日でも死に関する問題を日常生活に持ち込むことがタブー視されている中国人にとって、死を不可避な事実として受け止める精神を持つ日本人の死生観は、少なからぬ影響を与えるもののお考えであった。

本部会での発表者からのご報告内容については以上である。今回のご報告では、本コンソーシアムの「多文化共生社会に向けて」というテーマが強く意識され、例えば東洋思想と西洋思想の共通性による新しい見地の確立、また西洋文化や制度を日本で受容することによる作用、そして異なる文化的見地から考察する日本の伝統意識等について画期的な議論が展開された。質疑応答に関しても、参加者それぞれが専門とする観点から、多岐に渡る指摘がなされ、より考えを深め合うきっかけになった。